

## 第V章 考察

### 一 交易船と元軍船の碇石

福岡市文化財整備課 柳 田 純 孝

本文で報告されているように、1号・2号・3号・4号と碇石が木碇に装着された状態が確認されたことは画期的な成果といえるであろう。従来から碇石の復元については、推定の域をでなかったからである。更に今ひとつ注目すべきことは、装着された碇石が木碇の主軸をはさんで左右の2個で一对となる左右対称型だったことである。鷹島の碇石については、1992年に16個あると報告した<sup>(1)</sup>。そのうち「12個の大型品はいずれも一端あるいは両端が欠損しており、完形品はない」「よく整形された扁平なものが多いのが特徴」としている。この段階としては「そのいずれも完形品ではなく、中央部から折れた状態で、しかも片方のみの出土」<sup>(2)</sup>というのが一般的な認識であった。そして、1994年の調査で碇石が装備された状態が確認されたことにより、これは左右対称となる鷹島型碇石を見誤っていたことがはっきりとした。また、1号～4号のほかに浚渫工事中に引き揚げられた5号・6号・7号・8号についてもセットとなると考えられており、今回一挙に8組の木碇が確認されたわけである。

鷹島は古くから元寇関係の島として注目され、碇石についても「肥前鷹島付近から出たと云うことを、碇石を熟知する人からきいた」<sup>(3)</sup>という記述があるが、現在鷹島町立歴史民俗資料館に収蔵されている碇石(1981～1992年の調査で出土したもの)を整理するとTab.10のようになる。これは、石原渉氏が作成した14個に(1)・(3)の2個を追加し、計測値の一部を修正したものである。(1)～(4)は遺物番号がないため仮の番号をつけたもの、(247)は遺物番号はないが計測値から247と推定されるもので、出土地点を表示していないものも床浪の沖合からの出土と考えられるものである。

この表では、碇石の形状から3つに分けている。福岡市博物館では1995年に「碇石展—いかりの歴史—」を企画し、鷹島の一对になると思われる碇石2個が展示された。このとき碇石を①博多湾型碇石、②小型碇石、③鷹島型碇石、④小型漁船用碇石の4つに分類しているが<sup>(4)</sup>、さきの表はこの分類に従ったものである。ただし、ここでは④小型漁船用碇石は除外している。

#### ① 博多湾型碇石

古くから蒙古碇石として知られているもので、長さが2～3mの角柱状で、中央部が広く両端がやや狭い。幅と厚さは30～40cm×20～30cmほどで断面が長方形を呈し、表面は粗い加工跡がある。中央部に広狭2つの杵帯・溝があり、碇として固定するための工夫が施されている。広い方の面に幅20cmほどの浅い溝が堀込みがあり、狭い面に幅約5cm、深さ1～3cmほどの溝がある。重さは200kgを超えるものがほとんどで、なかには600kgを超える大型品もある。

このような碇石の初見は、1892年の『伏敵編』に図示された「蒙古碇図」である。次いで1931年の

博多湾修築工事中に碇石が発見されている。この段階で博多湾から引き揚げられたと考えられる碇石は8カ所9個であるが、1941年の「蒙古軍船碇石」では博多湾以外の肥前東松浦沿岸や壱岐も含まれており、合わせて21カ所22個に増加している。1959年福岡県教育委員会は、博多湾から引き揚げられた碇石のうち8個を「蒙古碇石」として福岡県文化財に指定し、1969年に1個を追加指定している。

その後岡崎敬、上田雄、松岡史、柳田純孝などの碇石に関する調査研究により、博多湾以外では福岡県相の島や久留米、佐賀県唐津市や呼子町、長崎県では平戸島の志々岐宮の浦・五島列島の小値賀島・壱岐、山口県萩市大井など西北九州沿岸一帯に40個以上分布していることがわかってきた。

鷹島から出土したものでは、**248**と(1)がこれにあたる。**248**は中央部付近から半折しており、全長は250cm以上に復元できる。重さは200kgを超えると推定される(PL. 35)。博多湾型と**248**を比較するとわずかに相違点がみられる。博多湾型の中央部には広狭の杵・溝があるのに対し、**248**の中央部は4面とも2～3cm彫りこまれた杵帯となっていることである。しかし、中央部が広く先端が狭くなるなどの特徴は博多湾型特有のものである。(1)は両端を欠損しているが、幅が33cmと**248**よりも大きい。鷹島型碇石では幅が25cmを超えるものではなく、これも博多湾型に分類できる。

## ② 小型碇石

1961年10月福岡市志賀島蒙古塚の沖合から全長98cmと88cm、重さが27kgと21kgの2つ碇石が発見された。これは、蒙古軍の小船か和船に使用されたものと考えられている。鷹島では**98・100**と(2)がこれにあたる。**98**は全長が65cm、重さが11.4kg、**100**は全長が52cm、重さが11.4kgのともに完形品。(2)は、『鷹島海底遺跡Ⅱ』(1993年)に報告されたもので、一部を欠くが復元長はほぼ**98・100**に近く、志賀島蒙古塚沖合よりひとまわり小さいものである。

## ③ 鷹島型碇石

Tab. 10 の**239～247**と(3)(4)の11個がこれにあたる(PL. 36)。しかし、**239～247**のなかには計測値の近いものがある。たとえば、**240**と**247**の全長は82cmと81cm、**241**と**243**の全長は86cmと89cmと類似しており、それぞれがセットになる可能性も考えられる。そのため、数が11個になるかこれより少なくなるかは定かではない。(4)は『鷹島海底遺跡Ⅰ』(1992年)に報告されたものである。今回報告の8組を含め、少なくとも鷹島では10組以上の木碇が出土していることになる。このタイプは今のところ鷹島以外での発見例がなく、鷹島独特のものといえることができる。

次に碇石の性格や年代についてふれてみよう。

明治時代に「蒙古碇石」との認識が示されて以来、それが定着し強化されてきたが、蒙古とは関係ないとする見方もある<sup>(5)</sup>。私は定型化した博多湾型碇石は日中間を航行した交易船のものと考えているが<sup>(6)</sup>、このような碇石研究の画期は、中国からの発見例が報告されるようになったことである。

1974年夏、福建省泉州后渚から多量の陶磁器類が積み込まれた沈没船が発掘された<sup>(7)</sup>。復元された沈没船は全長34.55m、排水量が約374トン、南宋後期の貿易船と考えられている。この調査では、碇を

巻き上げる紋車の部材や「丘碇水記」の木簡が出土している。

そして1983年には1975年4月福建省泉州法石郷晋江から碇石が発見されていたことが報告された。長さが232cm、中央部の幅と厚さが29×17cm、杵帯・溝のある定型化した大型品で、重量が237.5kg、石材は花崗岩である。博多湾をはじめとする西北九州沿岸一帯で発掘されるものと全く同形の碇石が中国でも確認されたわけである。しかも、同一地層から宋元代の陶磁器類が出土しており、12～13世紀頃の貿易船が碇石を装備していたことが確定したわけである。更に、1988年には同じく泉州から碇石2個の出土が報告されている。大きさは288cmと226cm、重量が385kgと250kgで、いずれも花崗岩である。また、福建省連江県定海湾でも元代の沈没船とともに碇石が発掘されている<sup>(8)</sup>。碇石の使用を示す資料としては『宣和奏使高麗図経』（1123年）がよく知られているが、このような類例の増加は、宋元代の交易船にとって碇石の装備が特殊な事例でなかったことを示している。

日本では鎌倉時代になっても三百石積を超える大型の船はないといわれているから、838年を最後とする遣唐使船を除くと日本には航洋船はなかったようである。一方、688年には筑紫館で新羅国使を饗している。唐商船は842年の唐人李隣徳を初見とし、以後も新羅船、呉越船、宋船などが平安時代だけでも百回余りも来航している。鴻臚館による官貿易システムから民間貿易へと移行する平安時代後期になると日宋貿易は一層活発になる。博多遺跡群の夥しい陶磁器のなかには「張」「周」「定」「王」などの中国人名の墨書土器が数多く出土しており、博多には日中間を往来した綱首が集住し、いわゆる「大唐街」を形成していたのである。博多湾内から碇石とともに「張綱」銘の墨書陶磁器類や古銭が出土したというのは対外貿易港として繁栄していた博多にふさわしい話である。これらの交易船が寄港した小値賀島、神集島、可部島から定型化した博多湾型碇石が発見されており、小値賀島の6個の碇石もこのような遣唐使船や博多をめざした交易船と結びつけて理解されている<sup>(9)</sup>。そして、最近の博多湾型碇石の出土地をみると、交易船の航行はもっと広範なルートを示唆しているようである。

1993年、脇長吉郎によって情報がもたらされた奄美大島の碇石は3個ある。そのうち竜郷町秋名の碇石は全長326cm、幅と厚さが38×28cm、中央部に幅23cmの杵帯と幅5cmの溝がある典型的な博多湾型である。これ以外に全長196cmと299cmのものがある。

元の軍船が博多湾にあらわれた前後に北のサハリンにも元が侵攻したといわれるが<sup>(10)</sup>、ウラジオストックにも碇石があることがわかった<sup>(11)</sup> (PL. 37)。これは、1993年4月現地を訪れた小畑弘己氏が確認したもので、全長が185cm、中央部の最大幅が30cm、広狭の杵と溝があり両端が狭くなる定型化した博多湾型碇石である。石材は花崗岩で、1991年夏ウラジオストック湾内のパポーバから発見され、同地からは中国産の陶磁器類も出土しているという。これによりウラジオストックへの交易船の来航が想定されるが、これに関連するような遺跡に青森県津軽半島の十三湊がある。十三湊遺跡と福島城跡は1991～93年に国立歴史民俗博物館による調査が行われ大きな成果をあげている<sup>(12)</sup>。それによると、十三湊の成立は白磁などの出土から12世紀後半に遡り、14世紀の中ごろから15世紀の中ごろにかけて、日本海屈指の貿易港として形態が整えられたようである。

1994年に博多湾の志賀島から2個の碇石が確認されている<sup>(13)</sup>。弘地区の碇石は両端を欠損した110cmのもの。勝馬沖の水深7mの海底で全長250cmの碇石が目視されている。

1995年には沖縄からの報告がある<sup>(14)</sup>。1つは恩納村山田グスクの井桁石に転用されたもので、全長が250cm以上、中央部の幅と厚さが30×22cm、先端部は30×22cmと狭くなっている。中央部に幅2cm、深さ1.5cmの溝がある。今1つは久米島の宇江城跡腰曲輪のもので、全長が213cm以上、中央部の幅27×16cm、先端部は20.5×8.5cmと狭くなっている。中央部に広狭の枠と溝があり、典型的な博多湾型である。いずれも年代は特定できないが、沖縄のグスクから多量の陶磁器が出土することはよく知られており、14～15世紀頃にピークをむかえ、この時期が琉球の「大交易時代」といわれている。また、糸満市では石敢當に転用された碇石が見つかった<sup>(15)</sup>。

このように「蒙古碇石」とされてきた定型化した**博多湾型碇石**は、中国では宋元代に、日本では鷹島の発掘例から13世紀後半の元の軍船に使用されていたことがわかってきた。14世紀前半の新安沈船は博多を発着地としているが、碇石か鉄錨かは不明である。碇石の下限ははっきりとしない。博多では正安4年(1302)銘の供養塔に転用された碇石があるが、沖縄を含め転用された時期が碇石の下限を示すわけではない。鉄錨が出現したあとも「爪つきの木石錨もあれば鉄製のものも」あったのであり、18世紀はじめ中山国(現沖縄)への使節船には「鉄の錨ひとつと木石製錨ふたつ」<sup>(16)</sup>があったとされている。このように木碇はかなり後まで残っており、沖縄や奄美大島から碇石が発見されても不思議ではない。かえって沖縄を含めた「東アジアの海上貿易のネットワーク」<sup>(17)</sup>の広がりを見せているといえる。

これに対し、鷹島では博多湾型や小型碇石が含まれるものの数は少なく、木碇の主軸をはさんで左右の2個が一对になる**鷹島型碇石**が大半を占めている。これは、弘安の役(1281年)で台風により鷹島沖で沈没した元軍の船に装備されていたものである。しかも、多くの元軍の船には交易船とは異なる左右対称型の鷹島型碇石を装備していたことが注目される。

鷹島型碇石を重さで分けると3つに分類できる(Tab. 11)。1992年以前としたのは1981～92年調査のうち完形品の重さを2倍したもの、1994年調査は左右一对となる碇石の合計の重さである。これを見ると、Aとした37.4kg～53.1kgが最も多く、Bとした100kg前後と合わせると全体の94%を占める。Cとした3号の338kgは特別に大きいように見えるが、博多湾型碇石の大部分は200kgを超えるものである。中国泉州湾では237.5kg～385kg。博多湾では唐泊の227kgをはじめ、584kgや600kgを超える大型品もあるから、交易船と比較すると一般的な大きさであることがわかる。元軍の船には大小各種の船が含まれ、大型船も多かったと考えられるから、今後3号のような大型の碇石が確認される可能性は高いというべきであろう。

註(1) 柳田純孝「蒙古碇石」とよばれる碇石 『考古学ジャーナル』343 1992 このなかに碇石に関する文献をあげているので参照されたい。ここではそれ以外のものをあげる。

(2) 石原渉「1993年度神崎地区潜水調査：出土遺物」『九州・沖縄水中考古学協会会報』3-1 1993

(3) 山本博「元寇役と博多湾出土遺物」上下 『歴史と地理』30-3, 30-4 1932

(4) 林文理「碇石展—いかりの歴史—」『Facata (福岡市博物館だより)』18 1994

(5) 筑紫豊『元寇危言』 積文社 1972 (6) 註(1)前掲書および註(1)前掲書の註(8)

(7) 泉州湾宋代海船発掘報編写組「泉州湾宋代海船発掘簡報」『文物』1975-10

(8)-1『はるかなる陶磁の海路展』図録 朝日新聞社 1993 -2 森本朝子「長崎県鷹島海底出土の元寇関連の磁

- 器についての一考察』『法哈噠』 2 1993 — 3 柳田純孝「碇石考」『法哈噠』 3 1994
- (9) 長崎県小値賀町教委『町内遺跡分布調査Ⅱ・Ⅲ』1986, 1987
- (10) 入間田宣夫「武者の世に—蒙古襲来—」『日本歴史』⑦ 集英社 1991
- (11) 註(8)— 3 前掲書
- (12) 「青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』64 1995
- (13) 『志賀島・玄界島—遺跡発掘事前総合調査報告書—』福岡市埋文報告書第391集 1995
- (14) 當眞嗣一「沖縄県発見の碇石について」『南島考古だより』52 1995
- (15) 湖城清「碇石発見される一糸満市—」『南島考古だより』53 1995
- (16) 王冠倬「中国古代における造船技術の歩み」 (17) 金沢陽「南海沈船とその時代」註(8)— 1 前掲書

Tab. 10 鷹島出土碇石一覧表 (1981～1992年)

遺物番号	発見年	出土地点	法量cm (長さ×幅×厚さ)	先端部 (幅×厚さ)	重さ kg	備 考
248	1981. 8	—	122×29×24	17×16	98.9	一部欠損
(1)	—	—	29×33×24	—×—	53.3	両端欠損
98	1981. 7	床 浪	65×11× 7	11× 6	11.4	完形
100	〃	〃	52×12× 6	9 × 7	7.6	完形
(2)	1992. 8	床 浪 港 沖	33×13× 9	10× 8	7.3	一部欠損(報告書Ⅱ)
239	1982. 8	—	68×23×12	20×10	39.8	完形
240	〃	—	82×24×15	18× 8	52.1	完形
241	〃	—	85×25×14	17× 9	50.1	完形
242	〃	—	78×25×12	18× 9	49.8	完形
243	〃	—	89×25×14	18×10	41.9	完形
244	〃	—	64×19×10	14× 7	23.8	完形
245	〃	—	59×14×11	12×10	18.7	完形
246	〃	床 浪 若 松	36×20×14	—×—	21.0	両端欠損
(247)	〃	〃	81×18× 9	13× 7	24.1	完形
(3)	—	—	44×22×15	21×12	29.3	一部欠損
(4)	1989. 6	床 浪 港 沖	52×22×10	18× 8	25.4	一部欠損(報告書Ⅰ)

Tab. 11 鷹島湾型碇石の内訳

分 類	1992年以前	1994年調査	割合
A 50kg未満か50kg 前後のもの	245—37.4kg 244—47.6kg 247—48.2kg  3 組	4 号—34.6kg 2 号—38.1kg 8 号—50.2kg 1 号—52.2kg 6 号—53.1kg 5 組	50%
B 100kg前後のもの	239— 79.6kg 243— 83.8kg 242— 99.6kg 241—100.2kg 240—104.2kg 5 組	5 号— 80.9kg 7 号—105.9kg 2 組	44%
C 100kgを超えるもの	0	3 号—338.0kg 1 組	6 %
小 計	8 組	8 組	100%



PL. 35 博多湾型碇石 248 (右) と(I)



PL. 36 鷹島型碇石 (上の横向き 2 個は小型碇石)



PL. 37 ウラジオストックの碇石 (ロシア科学アカデミー極東支部考古学研究所)

